

【那一寶】非其功とは、謂包含萬有も大海其功に非ず、包含萬有は非功與無功論、絶氣有<sub>二</sub>其德<sub>一</sub>とは、絶氣者不著は大海有<sub>二</sub>其德<sub>一</sub>、是強爲所作にあらざるなり、海印三昧本有妙功、無所住無所著、法皆如是、應如是知也、非其功有<sub>二</sub>其德<sub>一</sub>之語、回互而可見、非功而有<sub>二</sub>德<sub>一</sub>、非德而有<sub>二</sub>功<sub>一</sub>也。

所謂萬有の海徳は功無功の論に非る故に、たとひ絶氣なりとも不絶氣なりとも、不著不染汚なるべしと、これ包含萬有即絶氣不著なる道理なり、死屍たとひ死屍なりとも、不死屍なりとも、萬有に同參する行履あらんが如きは包含すべし、包含なるべしとは、此同參字學人の上にかけて不可見、只同じと云ふ義なり、不問死不死絶氣不絶氣、一切萬有法法同一不二同參行履、而盡界無他時處なり。

萬有なる前程後程その功あり、これ絶氣にあらず、いはゆる一盲引衆盲なり、一盲引衆盲の道理は、さらに一盲引一盲なり、衆盲引衆盲なり、衆盲引衆盲なるとき、包含萬有包含于包含萬有なり、さらにいく大道にも萬有にあらず、いまだその功夫現成せず、海印三昧なり

【聞解】萬有なる前程にも、包含する縁起の其功動つとめがある、こゝは參同契の萬物自有功……と云ふ意、萬有には初りも終りも妙應衆縁、其功がある、一向に絶氣で無し○一盲……出大論三十六卷、いはゆると云ふ處に、たとへばと云ふ詞を入れて見る意で、はやく聞ゆる、萬有が海印縁起するは、一盲引衆盲、海印三昧に入るやうなもの、其一盲引衆盲道理は、これに能引所引がある、一盲

△辨、有下、萬有包含ノ四字アリ、含下割云、洞雲寺本無此四字、秘本さる下有ニ字、△辨、さる下は字アリ

△辨、す下割云、せざるトアリテ好シ、△那、割云、現成セザルモ△辨、味下割云、此四字行ナランカ、

引一盲一時に、能引の海印も無く、所引の萬有も無い、こゝが海印の妙徳なり、この時包含萬有、被<sub>レ</sub>包含于包含萬有とは、縁起の萬有は、縁起に縁起せらる、宛轉無碍なり、大海水は大海水に縁起せらる、帝網重網々の道理、一波纒動萬波隨と云ふもこのこと、この真空性水の海印を修するには、六度萬行幾大道の修行仕様あり○萬有にあらずとは、縁起の道理合點ゆかぬにはと云ふこと其底には、海印三昧の道理具ては有れども、いまだ其功夫あらはれぬ○其功夫現成せざるも、海印三昧なり、あらはれぬはあらはれぬ海印なり、其聞法は具てある、一顯明珠卷の黒山鬼窟、進歩退歩が明珠なりと云ふ意と同じ、焉。正法眼藏海印三昧聞解終

【私記】とは、前程後程は、萬有の面目を獨露するがゆゑにその功ありこれ絶氣にあらずとは、萬有の氣息を斷續せしむるがゆゑに「一盲衆盲の隨流去なり」參本いはく「謂一以下、一齊獨露也」と

包含萬有包含于包含萬有とは、阿誰なる一物の萬有で包含するにあらずるをいへり、包含萬有は、海を道著するをもて、内なく外なく、中間もまた包含の渾淪なるなり「このゆゑに現成せるは萬有なり、なにの攝せざることなければ、海印三昧なりといへり」

【御抄】此程の詞は不可大切、只萬有なる前後萬有なるべし、絶氣とは不可云と也。是は世間に、一盲衆盲を引也と云ふ喩あり、一人の盲目か、あまたの盲目を引は、衆盲となると云ふ、是は非爾、一盲は一盲を引、衆盲は衆盲を引なり、佛は佛を引、祖は祖を引、乃至包含は萬有を引と云はむ程の道理也、此道理が包含萬有か包含萬有を包含する程の理にあたるなり、是則いく大道にも、此萬有にあらずる、いまだその功夫現成せず、海印三昧也と云ふなり。

【辨註】辨曰、萬法諸有上、海印三昧修證行程、千界衆生皆各有其功、譬如蜘蛛布網、結轉九不







味の説行證の引入は如<sub>二</sub>一盲引<sub>一</sub>衆盲、能引所引共に無<sub>レ</sub>所見、前の諸法の起滅も不言の起滅、今此引も無所見の引入、然れども一盲引<sub>二</sub>衆盲<sub>一</sub>といへば能引所引あるに似たる故に、一盲引<sub>二</sub>衆盲<sub>一</sub>の道理は更に一盲引<sub>二</sub>一盲<sub>一</sub>、衆盲引<sub>二</sub>衆盲なりとの玉ふ、然れば一盲非<sub>二</sub>能引<sub>一</sub>、衆盲非<sub>二</sub>所引<sub>一</sub>、無<sub>二</sub>一者<sub>一</sub>、無<sub>二</sub>衆之衆者<sub>一</sub>、非<sub>二</sub>大小<sub>一</sub>、非<sub>二</sub>自他<sub>一</sub>、是包含萬有、海印三昧、不可思議、妙功德なり、如來一代時教の説行證の引入も、亦復如是、何故諸佛衆生同一無<sub>二</sub>一、圓一圓<sub>二</sub>、盡界盡地、三世十方、無自無他、海印無外、是故包含萬有、萬有包含、圓轉回互、如<sub>二</sub>環無<sub>レ</sub>端包<sub>一</sub>、合于包含萬有<sub>一</sub>なり、更に幾<sub>レ</sub>大道の途路にも萬有にあらざるはいまだ其功夫現成せず、現成せざるも茫々たる無所見の海印三昧なり。

【御聽書抄】 ▲衆法合成此身と、今の海印三昧と、佛性に一切衆生悉有佛性と云ふと只同事なるべし ▲諸經に真如ぞ、佛性ぞ、實相ぞ、一心そなむと、云ふ其名異なれども、心が一なるか、或時は真如を爲本、或時は佛性を爲本、或時は實相を本とし、如此うちかへうちかへするか、又教行は各々の法あれども、證の時は只一なりなむと、教家には談ず、此事不可然、教行は眼前の法とあらはれたれば、各別と覺へ、證は不現の法なれば、をしひた<sub>レ</sub>けて、不知案内ゆるに、何も一也と云ふにてこそあれ、今は教行證いづれも、もれたる事不可有也 ▲衆法と云ふ、衆の字心得るかたさまありぬべし、衆生と云ふにも各々あるべし、人衆生、畜衆生、各々也とも云ふべし、人衆生の内、猶又業報の善惡によりて、各別さまなるべし、又總屬別名と談じて、多かる總に仰せて、衆生と云ふ文字ををけれども、この内一をいはむとして、衆生の名あるべし、經に一衆と云ふ詞もあり、衆と云ふは、多くあつまるにつきたる詞なり、諸と云ふ同心なるべし、然而一衆生と談ず、今の衆法合成の義もよく、可心得、三界唯一心を衆法と云ふべしや、▲海ととく事は佛法に多くこれをあぐ、佛性海、覺海、毘

盧藏海、無盡法界海、無盡藏海、薩婆若海(智慧なり)なむと、も云ふ ▲印はしるしをしてとも云ふ、ものをさだむる心なり、但ものを印すると、海をやがて印と仕とは、差別あるべし ▲三昧は定門と云ふ、その事のありさまこれ三昧也、無他事、其事をさして三昧とは云ふなり、今の三昧は海印なり、日光三昧、月光三昧、一行三昧なむと云ふこともあり、人間界には光を云ふに日月にすぎたるものなし、ところとしていたらざることなきゆへに、三昧と云ふ、諸佛諸祖とあるに必海印三昧也と云ふ、此三昧也と云ふなりの詞は、教なむとには、大やう三昧ありとぞ可仕、三昧をば佛のに所なして心得べき歟、然而宗門には諸佛諸祖、やがて海印三昧と仕ゆへに、三昧也とあるなり、三昧の游泳に説時(教とも)あり、證時あり、行時ありと云ふ、證にかぎらず、智を云ふにも、權智と云ふ事あり、是は化他智也他の爲なり、自行智と云ふは、今の法華經の心、唯一佛乘實相の義なり、達磨宗の如きは冷暖自知と云ふ、他によらぬ智と思たれども、專吾我に對したる智也、不可用 ▲説行證とこそ打任は立を、今證を中に置いて、證に行を立る心地は、無別義、但教家にはいかにも教行證の位を取、みだして云ふ事あるまじきを、佛家の家常としては、教の所に行證も具し、行の所に教證を具し、三立を一所に置とき、必何を前後とすべからず、ゆるに如此終にも置也、但佛祖の道に、必教行證はあるべき也、又自證と云ふ事あり、教にも證不由他と談ず、但其も猶自證と云ふばかりこそあれ、教行をさきに置いて、まづ證なるゆへに、不由他の詞も無詮、今こなたに談ずる證こそ、眞實の證なれ、教行ををかざるゆへに自證なり、又自教自行とも談べし、是不次第也 ▲海上行の功德その徹底行ありと云ふ、説時あり、證時あり、行時ありとこそ、はじめにはあけられたるに、海上行徹底行なむと云ふて、教證の沙汰なし如何、但教行證一なる故に只行ばかりをあげたるも不足の義なし、ゆるに海上行徹底行とあるなり、こ



の海上行徹底行は、究竟卽位と心得べし、又海上と云ひ徹底と云へばとて、うへぞ、そこぞ、なむと對してとくにはあらず、上といふも底と云ふも、たゞ海印三昧のありさまを云ふなり、ゆへに深々海底行なりと、海上行するなりと云ふ▲還源せしめむと願求する、是什麼心行にあらずと云ふは、生死の波浪をいとひすて、無爲寂靜に歸入せむと、分限を定て願求するにはあらず、ゆへにいかないと不審する心行にはあらずと云ふ也▲還源返本と談するに、順流逆流と云ふ、還源は逆流なるべし▲透關破節と云ふは、脱落の心地也、還源返本あるべからず、▲諸佛諸祖の面々と云ふは、はじめに諸佛諸祖とあるに、かならず海印三昧也と云ふ同事也▲佛言但以衆法合成此身、起時唯法起、滅時唯法滅と云ふ衆法合成は此身也、此身は起滅也、この起滅やがて、さきの衆法の法なり、但以衆法合成にて、此法起時ととり、但以衆法合成にて、不言我起とる、たとへば諸法實相といひ、諸法不安といはむ、詞のかはり程也▲この衆法は、萬法諸法百草なむと云ふ同詞也、合成此身と云ふ、合成此法ともいふべし、身と云ふは又盡十方界眞實人體の身なるべし、此合成は際限あるべからざるなり、總は衆法不合成時刻不可有也、合成此身と云ふを吾我の身と不可思、合成法身とも云ふべし▲地水火風等の四大已下、諸法を取合て身と云ふにはあらず、衆法の衆は只一と心得べし、但以衆法合成此拳頭とも、但以衆法合成鼻孔とも、乃至拄杖拂子とも云ふはむが如し、此問の一切の詞を今の此身の身に取替て心得べし、衆與一は一多相卽の義なるべし▲衆法合成と云はむときは、起滅の詞もあるべからざる也、何を起とも滅とも云べきぞや▲起時唯法起、滅時唯法滅、此法起時不言我起といふ、此法起時不言我起といふ、法外に我と云ふ事不可有ゆへに不言也、但いはすと云ふも、云ふに對して云ふゆへに、なを不道にはあらずと云ふ、此法起時不言我起と云ふ、この法より外に我あるべからず、ゆへに不言我起なり、此

法滅時不言我滅の義同上、起三界一心なれば不言一心也といはむが如し、不言といへばとて、さらふ心地にて不言と云ふにはあらず、起滅唯法なればかならず不言我起とも、不言我滅ともいはる、也、唯法の上はすべて我と云ふ事なきゆへに、不言の詞いでく、或人疑曰、敎家には會不會、覺不覺、悟不悟なむと云ふ、詞を用るには、必會はさとり、是佛の位、不會は迷、是凡夫の位とさだむ、佛法の上には會不會共仕なり、如然ならば今不言我起といふ、又言我起とも云ふべきか、答曰誠不の字を置不置事、佛家の故實なれば、言我起とも、云ぬべけれども、こゝには尤不言と云て、言とばかりいはむと云ふ風情は不可有、其故は此不言の詞は、我に付て云出す詞也、唯法と云ふ上は、我と云ふ事跡をけづりて不可寄、其上は不言も、言も不可有ゆへに、又ひきわけて言我起といはむと、いふぎ不可有(不言あるべからざるむ上、)抑此法と起滅をとりふせぬる上は、我も法の上に置て、法我とはなどかいはざらむと云ふ義もありぬべし、法の我は大我なるべし、或は法身周遍法界ととき、或は盡十方界眞實人體の我なるべし、小我は外道の見なり、常樂我淨の四顛倒なり、此我なるべし、起は生なり、滅は死也と、覺えたれどもさにはあらざるべし▲此起滅は我等が生死にあらず、我身につきて云はむ邪見也、世間に云ふ起滅は、只一時の見也、物一を置て、それに付て起滅をば心得也、今の起滅は法の起滅なるゆへに、際限なき也▲此法起時、不言我起、此法滅時、不言我滅と云ふは、起時滅時唯法ならむには我といはれがたし▲前念後念念々不相待、前法後法法々不相對と云ふは、此前後の字は不用にて、念の字ばかりを取ゆへに、念とは云ふ也、法々又同▲嶺南人段 佛性の談のとき、佛性は成佛よりさきに具足せるにあらず、成佛より後に具足する也、佛性必成佛と同參する也と云ふ、この道理に通じぬるときは、成佛よりさきに具足するいはれも心得ぬべし、今の前後も是程也、しかあれども前後の詞



いできぬれば、相待相對する心地なるを、かさねて念々とも法々とも云ふ時、相待相對する事あるべからず、たとひ對すと云とも、大乘因者、諸法實相也、大乘果者、亦諸法實相也と云ふ、因果程の事也  
▲得道入證は必しも多聞によらずと云ふ、一師の下にて遍參すと云ふにて可心得合、四句に得道し一句證入すと云ふ、たとへば周利盤特が守口攝意身莫犯、如是行者得度世と云ふがごとし、此一句に了達しき(或三年或一夏間此文覺ゆと云々)千經萬論を多聞廣學すとも必得道すべきにあらず、四句にても可足、一句にても可證、又一卷金剛般若を聞學せむをば、多聞廣學とたて、たゞ若以色見我以音聲求我等の四句許を聞學せば、少聞狹學とも云ふべし、但所詮四句にてもあれ、一偈にもあれ、得道入證せば、多聞廣學なるべし、不可謂小聞哉▲恒沙の徧學つひに一句偈に證入するなり、いはむやいまの道はと云ふ、此道は但以乘法合成の事也▲始覺、本覺縱始覺にもあれ、本覺にもあれ、前途の位を置て拈來せむは、佛祖の道には不足也、ゆへに是をくだして、始覺本覺の諸覺を、佛祖とせるにはあらざる也と云ひ、佛祖の方よりは始覺本覺の道理を、あきらむれば、佛祖の功德也と云ふなり▲教に始覺は本覺に冥すと云ふ、又始本不二と談ず、この宗門には釋迦文佛、三十にして成道し御しとき、大地有情同時成道と被仰、ゆへに始覺ととりがたし、今又成道し御せば、本覺と難云、始覺本覺を共に超越したる成道と云ふべき也、如此云へば又さればこそ冥すと云へど心得る族ありぬべし、然而冥と云ふは、猶本覺始覺ともたてあはせて、冥と云ふ時に、相對能所の見難離也▲いはゆる海印三昧の時節と云ふ段、合成此身と云ふは三界唯一心の心と、此身の身とは同可心得合▲一合相と云ふは、教に打任談するには、五蘊等の一合したるを、人身となす、是は不可然、但以乘法合成此身を一合相と云ふ、必しも身とのみ不可心得、乘法身なるべし、此壞身をさして、一合相と云ふ、さればとて、又嫌ていはじとはあらず、

此身と云ふは、盡十方界眞實人體と云はむときは、此身一をば取出すまじ、乘法合成の此身なり▲一合相は此身也、此身を一合相とせるにあらずと云ふ、心地は、此法起時、不言我起法と云はむが如し、如此可心得合也、或又三界一心也、一心は三界に非ずといはむが如し▲起をのこすに非と云ふ、是は法起なるゆへに、のこすに非と云ふ也、法の起なれば、知覺知見にあらず、法がやがて起なれば、起をのこさざる也、我起は法也、法と起とを置て、こなた、かなたへとるにあらず、起法は此身と可心得、別人なし此身一人也▲落便宜と云ふたとへば、便宜を得たりなむと云はむが如し▲いかならむかれ起なる、起也なるべしと云ふ、是は時節の到來、不到來の差別なき程をいはむとて、起也なるべしと云ふ▲起時は此法也、十二時にあらず、此法は起時なり、三界の競起にあらずと云ふ、十二時にあらず、三界の競起にあらずと云ふ事を、ひとしめて三界の事を云かと覺たれども、こゝには起時と云ふ、時ばかりをこそ、沙汰するときに、十二時と三界の競起とをあらずと云ふ事を、ひとしめて心得むとにはあらず、ゆるに如此云ふ、十二時は此法起時の時にあらず、又三界競起とも不可云ふ、三界の競起にあらずと云ふ、成劫懷劫なむと云ふ世間の起ぞ、三界競起と云ふ時に、いまはあらずと云ふ也▲我起なる但以乘法也、聲色と見聞するのみにあらずと云ふ、乘法が聲色とも量法ともいはるゝ也▲忽然火起と云ふ(法華經譬喩品此文あり)あひ對する事なく早くをこると也、これ法華のすがたがかく云はるゝなり、この起相待にあらざるを火起と道取する也と云へり、顯然也▲古佛云起滅不停時如何と云ふは、不停は無盡の義也、生也全機現の心也、世間の道理にはやがて、起滅の法を不停なるものと心得、起は生、滅は死と心得るゆへに、今はさはあるまじ、心不可得を心得るにも、心を三界と體脱しぬる上は、可得とも不可得とも、沙汰のかぎりにあらず、只心は不可得と可心得、三世不可得は、只一心不可得也、



一心過去也、一心現在也、一心未來也、三世に對してすぐるぞ、と云ふが如く、我々起、我々滅と云ふ時に不停也、不言不待不言そに取替る許也、起の上にても不停、又滅の上にても不停也▲彼に一任してと、さすは、我々起の事也▲起滅不停時を佛祖の命脈として、斷續せしむとはこれ何を斷じ、何を續せしむと云ふにあらず、この起滅不停時の道理を、佛祖の命脈として、取捨せよなむと云はむが如し、起滅共に法なれば、起のとき滅とも仕べし、初中後滅なるゆへに▲滅の我なる時節に不言なると、起の我なる時節に不言なるとは、不言の同生ありとも、同死の不言にはあらざるべしと云ふ、起滅の二のうへに、不言の詞を用る、是即起滅は二の法に似たれども、不言の方を取て、同生と云ふ不言の詞は、同じと云へども起滅の方は不同なるがゆへに、しばらく同死の不言にはあらずと云ふなり、相待相對の詞あるべきにあらず、しかれども如此つかふなり▲不言は不道にはあらず、道得は言得にあらずと云ふ、佛法の上の詞には、起滅を生起ともとらず、同ともとらず、同と云ふも物二をならべて同と云はねば、不同と云ふ詞も、又世間に物を二竝て、不同と云ふにてなければ、同不同會不會もさはりなく可仕、所詮生も死も同も不同も、いかやうにも引なして仕ふ、是言語にかはらぬ本意なり▲還是不足と云ふは、世間にいひもちあるが如く、もの、たらぬ事を不足と云ふにはあらず、たとへば會不會をともし、佛法の上にはをなじ詞にもちあるやうに、遍身是手眼を不足と仕べし、これたらざるにはあらず、通身是手眼を又不足と可仕、これも満足とぞいはまほし、けれども不足と云ふべからず、ゆへに不足と云ふ、非可驚、上に進と云も、前にすすむにてなし、ゆへに不足と仕ふ、相見と云へども、兩人相見にてなし、是程の不足也、通身遍身と云ふ程にては、手眼とばかり、とりわき不可云ゆへに不足と云ふとも心得ぬべし、但此手眼は又無際限手眼なるときに、不足

とも満足とも難云、滅の手眼滅の行程手眼も又如是▲官不容針私通車馬也とは、この語世俗より出たり、たとへばをほやけ事には、はりを入じとし私には車馬をも通ずれば、わたくしからたる詞と聞ゆるを、いま所引は、起は初中後起なれば、又他を不交る所の證に、官不容針と仕ひ、滅又初中後滅にて、他を不交る所の證に初中後を通せさせて、私通車馬と云ふ也、所詮容通之二字を爲取也▲從來の滅處に忽然として起法すとは、三界唯一心と談する程にては、起も三界、滅も三界なるべければ、滅の所をさして起とも仕べき也、三界一心なるゆへに▲滅與滅相待するにあらず、相對するにあらずとは、滅與滅と云ふ上は、相待相對と非可嫌と覺たれども、世間に人與人こそ相見すれば、滅與滅もこゝには云はじと也▲滅も初中後滅也、相逢不拈出、舉意便知有とは、相逢と云へども、自他相逢するにあらず、不拈出と云ふも何物を不拈出ときこへず、ゆへに不容針にあたる、舉意便知有と云ふ、舉意すればやがてある事をする也(舉意をやがて知有とするなり)○この有は無の有にあざるべし、ゆへに私に通車馬にありたる、相逢不拈出と云ふ詞、やがて舉意知有なるなり、此知慮知の知にあらず、上に相逢不拈出と云心にて如此云ふ也▲從來滅處に忽然として起法すとも、滅の起にはあらず、法の起也といひ、今又從來の起處に忽然として滅すとも起の滅にあらず法の滅也と云ふ、如此起滅をあげられて、たとひ滅の是即にもあれ、たとひ起の是即にもあれ、但以海印三昧名爲衆法也、是即の修證はなきにあらず、只此不染汚名爲海印三昧也とあり、是は起の所にも滅し、滅の所にも起すとも云べしとなり、起滅ともに法の詞なるゆへに、たゞ起の時を是即ととき、滅の時を是即といはむとはあらず、起の時も滅とつかひ、滅の時も起と云ふべし、さきには起滅を不相加、今は又起の所に、滅ともつかひ、滅の所に起ともつかふ、是即は滅の所の起なるべし、法の起滅は不染汚の起滅也▲但以海印三昧名爲



衆法と云ふ人の修する三昧にてはなし、海印三昧也、海印三昧を名づけて、衆法とす、この衆法を此身とす、ゆへに海印三昧と衆法と、此身と一也、不染汚を以て海印三昧とす▲背手摸枕子の夜間也、夜間のかくの如く、背手摸枕子なる、摸枕子は億々萬劫のみにあらずと云ふは、背手摸枕子をやがて、夜間ととる、回頭換面ほどの義なり、夜間と云ふもあきらかに物をみたるにあらず、背手と云ふも、手をうしろにしたるまさしき、心地ならず、さぐると云ふも、とりえたるにあらず、億々萬劫までもかざらずとあり、得る所ありともみへず、とる所もあり、あきらかなる所もありと云は、猶起滅相對の心地もあるべし、染汚なるべし、あきらかなる眼には、一塵もみえずと云ふ程の心地也、明眼をば背手摸枕子に心得合すべし、此背手摸枕子、通身是手眼と云ふ程の事也▲我於海中唯常宣說妙法華經と云ふ、此心地は我於海中には、いかなる、法をか、とくといふ也、又唯常宣說妙法華經は、いかなる所にてとくぞと云ふ也、我於海中の詞、說法華經ときこえ、說法華經の所に、海中はあはるゆへに、不言我起なり、法華の伺とは、法華を解る所を云ふなり、又この我は佛と聞ゆ、海中は如龍宮にて道場を儲け、宣說妙法華經は、說法と如此わけて聞ゆれども、現身說法あり、身と云ふも法と不可差別、又我於海中は、十方佛土中唯有一乘法なるべし▲千尺萬尺の絲綸とは、法華也、直下に垂なり、但釣のいと、直下なる許にて、つり得たるものありと云ふまじき、道理を如此述也▲滿船空載月明歸とは、此滿船空は我於海中也、載月明歸は唯常宣說妙法華經なり、我與海說法とはたとへば、空與船月となり、我於海中唯常宣說なる、滿船空は、我於海中也、載空の船ともいひつべし、この歸の字、實歸也と云ふ、東西に歸にてはなし、際源なくして歸也▲滿船空載月明歸也、此實歸は便歸來也とは、實歸の歸は、實相なるべし、實歸來と云ふ來は、去來の來にはあらず、たゞ實歸なり▲只佛道の界限に現成するのみなりと云ふ、佛

道には界限なしとこそ云ふに、今は界限に現成するのみ也と云ふは、世間にいふ界限にてこそなければ、佛道の上にては、又界限を云はざるべきにあらず、無量の際限なり▲印水の印とす、さらに道取す印空の印也、さらに道取す印泥の印也、印水の印かならずしも、印海の印にはあらず、向上さらに印海の印なるべしとは、印水と云へば水とばかり心得、印泥と云へば泥とばかりと心得まじ、いま大海を心得るには、内外海にあらず、重淵九淵にあらずと云ふ、様に心得べしとなり、是をこそ海印とも、水印とも、泥印とも、心印とも云ふべけれとなり▲曹山元證大師段、因僧問、承教有言大海不宿死屍如何是海▲凡經の教にあらずと文、凡は實にすつべし、聖はなどかたらざらむと、覺たれども、凡に對したる聖は嫌所なり▲附佛法の小教と云ふ、外道を小とは取也、附佛法と云ふ時は、大小乘共にあるべし、かならずしも小教とくだしがたし、小乗もふさねて大法と云ふ様に、附佛法の詞はあれども、小教と云ふ時は必外道をさすなり、四十二章經小乘經也、しかれどもこれをわたすをも大法東漸なむと云ふ事もあり、附佛法と云へば、外道ながら佛法につきたる見のあるべきかと聞ゆ、不可然、外道といはむとき、すべて佛法まじはるべからず、しかれども佛法の詞をかりて、邪義を談するを、附佛法の外道とは名づくるときに、殊きらふべき外道なり、たゞをのれが邪見のみならず、佛法を損するゆへに▲大海不宿死屍と云ふは、死屍と云へばとて、世間の屍とは不可心得、只不宿と心得也、人々見ざる物也と云ふ、上は努々屍とばかりはいふべからず▲三界唯一心、心外無別法と云ふ、然者一心には、三界不宿と云はむが如し▲海も世間の海水許にこそ不宿なれ、濱にも岸にも打上られむ時は、宿死屍なるべしや、佛法にはいづれの所も海なれば、包含ともいはれぬべし▲學人のうたがふ所にあらずと云ふ、此學人は今の宗門の學者をさす、内海外海八海等の事をば、もとよりうたがひも、うた



がはずも、あるべからざるゆへに▲如何是海と問は、不問世間海、佛法の海を問、たとへば如何是眼晴とも、頂額とも、鼻孔とも云はむは、さすが人面ごとにあるまなこ、はななむとをば、事あたらしく、いかなるかと問べきならずと思さだむべし▲包含萬有と云ふ、一切海ならざる所がなき道理を云ふ也、死屍を隔てむは、大海の義あるべからず、かゝらむ時は、宿死屍とも云ふべし、よろづの物を、かね含たると不可云、たゞ包含許と可心得、萬有と云へばとて、袋に一切の物を入る様に不可思、大海は廣ければ、一切を含といはむとはあらず、盡十方界を大海と云ふべし、いかならむと云ふより、すでに世間の海にはあらずと聞ゆ、又一切の佛法が、佛法ならむには、不宿死屍と云ふべき様なし▲爲什麼不宿死屍と云ふは、包含萬有ならむには、不宿いはれなしと云ふ心地也▲絶氣者不著と云ふ、大海の道理には、絶氣不可有、大海不宿死屍と云ひつる時に、絶氣のものあるべからず、ゆへに不著と云ふ也、絶氣は死屍にあたるべし、不著不宿也▲既是包含萬有爲什麼絶氣者不著と云ふ、是詞の定に可心得▲萬有非其功絶氣と云ふ其功とあるは、萬有の事也、然者非絶氣歟被包含物非絶氣、本の生死輪轉の法ながらと云ふ義は不可有事也▲海に非るを海と認するのみにあらず、海なるを海と認する也と云ふは、佛法には世間の海にあらざるを海と認する也、強爲の海は世間の海、大海とは佛法を云ふ也、衆法合成は大海也(佛法海は諸法實相也、三界唯心也是程海也)心不可得の草子に、不可得裏に過去現在未來の、窟籠を剝來せりと云ひしが如く、今は又不宿の上に、萬有を剝來せりと云はむが如し、大海は衆法合成也、包含萬有也、不宿也、ゆへに剝來せりと云ふべしと也▲明頭來明頭打と云ふ、大海の面を不宿と、とく心也、物を置て不宿と説にはあらざる也、此義をとくに、明頭來明頭打と云ふ、只大海は不宿死屍の道理のみあるいはれなり▲包含萬有とは云へども、其物を含といはず、たゞ明來は明也、暗來は暗

也と云ふ様に可心得▲不宿死屍と明頭來との詞を、心得合すると云ふは、此海は水とのみにあらねば、陸地にても不宿死屍なるべし、海と云へば不宿死屍なるべし、明頭來も何事につきて、明來と云はず明暗を竝たるにあらず、只明頭來明頭打也、故に如此云ふ、海と云つれば、必不宿死屍也、宿といはれむ物は、染汚の法になりぬべき故に不宿とは云ふ、今明頭來明頭打と云ふ、物の二ならばぬ事を、たとへに云ふ時に、不宿の詞にひきのせらるゝ也、大海を包含萬有とは云へども、死屍をとめず、大海のならひとして、包含をやがて、包含すると也、他物を包含するに非ず▲幾度逢春不變心と云ふは、心を不變程なれば、不逢春也、たとへば、草木の春にあへども如不生、死屍は人々不見と云ふも不逢春と云ふ程の事也▲世間の詞に見師と云ふ事あり、又欲見師は、可見弟子と云ふ、師説を體に不傳は、不可見師、又弟子とも難云、抑不見師と云ふにも、二の心あるべし、皮肉骨髓より、相傳たらば、師弟不可爲別、ゆへに見義もありぬべし、春は死屍を不見なり、朽木になりぬれば、春に不逢▲人々未見物なりと云ふ、大海がやがて不宿死屍なれば死屍は人々みすと云ふなり、只大海萬有包含なり、この人と云ふは、悟人とも迷人ともさゝす▲たとひ山也とも高々峯頂立のみにあらずと云ふ、萬有包含したる心なり、山なるときは山包含萬有、水ならむときは又水の包含萬有ならむする心なり、不宿死屍とも包含とも、絶氣者不著とも、可心得也▲毘廬藏海と云ふは、法身也、佛性海、毘廬藏海、是只一事也、佛性をときし時は内外中間にあらずと云ふて、悉有は佛性也と云ふ▲其道理一なるべし、今の海又如此、しかあれば内海外海八海等にはあらずと云ふ▲たゞこれ萬有也と云ふ包含が萬有なれば、こゝには今は包含は不用なる心也▲多福一叢の竹と云ふ、多福は所の名なり、一叢と云ふ心地は、衆法合成の義也▲曹山は包含萬有の道著、すなはち猶是萬有也と云ふ、是は曹山の詞



をほめたるなり、萬有と云ふとも、萬有ならぬ心地もありぬべき所をいふべきを云ひたりとはむるなり、疑著と云ふは世間に云ふ不審の疑にあらず、佛道の上の詞なるべし、此疑著は、なにとしてか大海なる、何としてか、佛なると云ふ程の事也、疑著の面目とは僧の云ふ爲什麼絶氣者不著の詞をさす、いま是什麼心行なるべしとあれば、しやくしたるにあたれども、爲什麼絶氣といふも、是什麼心行と云ふも、只同事に聞ゆ、如何是佛といふ問に、如何是佛と答せむ程の事歟、爲什麼とこそ僧は云ふ時に、何事を疑ときこえず、故に此疑は疑にあらざる也▲是什麼心行なるべしと云ふ、是は爲什麼絶氣者不著の返事に似たれども、此返事に不限、包含萬有の道理を皆解する也▲從來疑著這漢と云ふ、是疑にてなし、疑著這漢に相見と云ふと可心得、たとへば迷中又迷の漢と云ふが如し▲死屍也とも不宿の直須萬年也と云ふは、三界一心也とも、解脱三界也ともと云はむが如し▲這老僧一著子と云ふ、不著の詞を這老僧と云ふなるべし、一佛と云ふ程の事也、誰人と、差て云ふにはあらざるなり▲萬有非其功絶氣、いはゆるは萬有はたとひ絶氣也とも、不著なるべし、死屍たとひ死屍也とも、萬有に同參すと云ふは、絶氣とは死屍を云ふべし、然者絶氣は不著なるべけれども、すでに死屍也とも、者不著にあたるべき、包含萬有には絶氣なし、實相の外に諸法なし▲一盲引一盲と云ふ、大海を總に置て包含すと云はぬ道理をとくに、たとひ盲は盲なるべしとなり、このゆるを一盲引一盲と云ふ也▲包含萬有包含于包含と云ふは、物をかね合にてなきゆへに、かねふくむが、やがてかね合也とは云ふなり。海印三昧終

正法眼藏海印三昧

仁治三年壬寅孟夏二十日記于觀音導利興聖寶林寺

却退一字參

正法眼藏海印三昧 網珠無影參却退 海印三昧名義典據 涉典錄上層誌大集經第十三二第十四文引探立記第四九七十性起品三十二之三十五文唐經第五十二如來出現品第三十七之三云云 演義鈔十三往檢須知 涉典錄引大寶積經二十五被甲莊嚴會文 皆是本卷弟子眷屬 勿強穿穴

●諸佛諸祖必海印三昧也文 爲諸佛諸祖 必海印三昧也 如是布置 雖不相妨礙、予也不爾 直讀諸佛諸祖 必海印三昧也 則天真而妙 不岐入法 一條是海印三昧 獨露眞常也 譬如如來全身 諸佛諸祖 不損一毛 海印三昧不讓片滴 汝之與吾亦如是

●此三昧游泳 說時有矣 證時有矣 行時有矣文 教行證一等也 如往附錄永平法語 一等宗旨 謂之游泳者乎

●海上行功德 有其徹底行 海上行諸深海底行也文 初善 中善 後善 其語巧妙純一無雜清白梵行 其到佛猶不廢退 則此海上行也 又友于行佛威儀 其徹底行消息 至下自分明也

●非願求使還源流浪生死 是什麼心行文 此三昧者 海上行功德 其徹底行耳 非以此三昧 願求使流浪生死還回寂住宗源 是什麼心行 謂是什麼心行 不心行



屈一途也。而今單觀心行二字好。是什麼三字同文故來也。今為左右驅烏沙彌。鼓舌頭喃喃者也。

●從來透關破節。固雖諸佛諸祖。面是海印三昧。朝宗也。本已上序文。照應可知。向上關根。大難透過。劈竹初節。亦復難破。透過破碎之者。稱之諸佛諸祖。是必海印三昧。朝宗也。始稱游泳。此謂朝宗。其海印印。馬大師海印三昧。云一念妄心即是三界生死根本。但無一念。即除生死根本。即得法王無上珍寶。無量劫來凡夫妄想。詭曲邪偽。我慢貢高。合為一體。故經云。但以乘法。合成此身。起時唯法起。滅時唯法滅。此法起時。不言我起。滅時不言我滅。前念後念。中念。念念不相待。唯法滅。此法起時不言我起。滅時不言我滅。前念後念。中念。念念不相待。念念寂滅。喚作海印三昧。攝一切法。如百千異流同歸大海。都名海水。住於一味。即攝衆味。住於大海。即混諸流。如人住大海中。浴即用一切水。而今言非願求使還源。流浪生死。是什麼心行。豈非是天殊地別乎。而其底理。馬祖不舍生死。與聖不取生死。謹言。

●佛言但以乘法。合成此身。起時唯法起。滅時唯法滅。此法起時。不言我起。此法滅時。不言我滅。前念後念。念念不相待。前法後法。法法不相對。是即名為海印三昧。是諸誌之所致。依馬祖而非道一。憑居士而非俗諦。祇是與聖自道取也。佛言者。淨名經第五卷文殊師利問疾品。維摩詰言。有疾菩薩。應作是念。今我此病皆從前世妄想顛倒諸煩惱生。無有實法。誰受病者。所以者何。四大合故。假名為身。四大無主。身亦無我。又此病起。皆由著我。是故於我不應生著。既知病本。

即除我想及衆生想。當起法想。應作是念。但以乘法。合成此身。起唯法起。滅唯法滅。又此法者。各不相知。起時不言我起。滅時不言我滅。云云廣說。此中應起法想者。法無我觀也。慎勿依文解義。

●此之佛道。應委悉參學功夫。道言也。指注佛言至海印三昧者。也。

●得道入證不必由多聞。不由多語也。多聞廣學。更得道四句。恒沙徧學。終證入一句偈也。多聞以下。大智度論卷十一。如佛偈說。一切衆生智。唯除佛世尊。欲比舍利弗。智慧及多聞。於十六分中。猶尚不及一。復次舍利弗智慧多聞。有大功德。年始八歲。誦十八部經。通解一切經書義理。○大目犍連。舍利弗。友而親之。舍利弗才明見貴。目犍連豪爽最重。此二人者。才智相比。德行互同。行則俱遊。住則同止。○佛度迦葉兄弟千人。次遊諸國。到王舍城。頓止竹園。二梵志師。聞佛出世。入王舍城。欲知消息。爾時有一比丘。名阿說示。著衣持盂入城乞食。舍利弗見其儀服異容。諸根靜默。就而問言。汝誰弟子。師是何人。答言。釋種太子。厥老病死苦。出家學道。得阿耨多羅三藐三菩提。是我師也。舍利弗言。汝師教授。為我說之。即答偈曰。我年既幼稚。受戒日初淺。豈能演至真。廣說如來義。舍利弗言。略說其要。爾時阿說示比丘。說此偈言。諸法因緣生。是法說因緣。是法因緣盡。大師如是言。舍利弗聞此偈已。即得初道。還報目連。目連見其顏色和悅。迎謂之言。汝得甘露味耶。為我說之。舍利弗即為其說。向所聞偈。目連言。更為重說。即復為說。亦得初道。二師與二百五十弟子俱到佛所。佛遙見一人與弟子俱來告諸比丘。



汝等見此，二人在諸梵志前者不，諸比丘言已見，佛言，是二人者，是我弟子中，智慧第一，神足第一弟子，大衆俱來，以漸近佛，既到稽首，在一面立，俱自佛言，世尊我等於佛法中，欲出家受戒，佛言善來比丘，即時鬚髮自落，法服著身，衣蓋具足，受成就戒，已略誌如是，是等且足引證，涉典錄爾，莫守一隅好。

●況今道者，非本覺求前途，非始覺拈來證中，凡現成本覺等，雖佛祖功德，非始覺本覺等，諸覺爲佛祖也，本始本二覺，可參馬鳴大士，既誌行佛威儀參矣，前途指進步地，證中名任運已到，非求非拈來者，前後際斷也，凡現以下須知開示不染汚宗，既參行佛威儀往檢須知。

●佛言但以○海印三昧，以上六十二字，七十五帖本牒之，通本所無，故略書。

●謂海印三昧時節，則但以衆法時節也，但以衆法道得也，是時謂合成此身，合成衆法一合相，即此身也，非此身爲一合相，衆法合成也，合成此身道得此身也，帝網寶珠總無影，衆影映來失却珠，合成此身衆法活，此身今古暫須與，我法無海印發光智伏愚，非此身爲一合相斥外道見，衆法合成以下，正法眼藏海印三昧佛祖煖皮肉也。

●起時唯法起，此法起非會遺起，向道合成衆法一合相即此身也等，其非會遺起也，若夫遺起，焉稱唯法起，可謂外計我起，誰正法眼藏海印三昧。

●是故，非知覺非知見，之謂不言我起，是結正意，非會遺起，於是乎明矣，爲無我爲主宰，謂不言我起，謂之解脫三昧。

運本起字無之

●不言我起，非別人見聞覺知思量分別此法起，再三丁寧不言我起，非別以下，不言滑轉轉也，別人若見聞分別此法起，何稱不言，我人及法非法我已。

●更向上相見時，正有相見落便宜也，不言向上相見，則有不言相見落便宜也，今落便宜，得便宜不染汚底而已。

●起必時節到來也，時起故，如何是起，應起也，時節到來也者，不到來時節，未曾有之也，山時也，河時也，有佛性時也，無佛性時也，時節若至，其理自彰，是等時節，皆共起也，如何是起，則起也是，謂之問處道得，僧問曹山，承古有言，未有一人倒地不因地而起，如何是倒，師曰，肯則是，僧云，如何是起，師曰，起也，向道此法起非會遺起，今亦恁麼消息也，故云倒臥橫眠得自由，生死去來真實人體，既起是時起也，無不獨露皮肉骨髓，起即合成起故，獨露友于不依倚一物也，皮等，一自是無拘自它彼此也，恁麼獨露是時也，起也，無一物之謂合成，故知皮髓不惹外塵，又非肉骨一塵之遺皮髓乎，合成因緣實是恁麼，心盡三世情忘表裡而已。

●起之此身，起之我起，但以衆法也，非見聞聲色，我起衆法也，不言我起也，不言非不道，道得非言得故，起時此法非十二時，此法起時非三界競起，一顆明珠，卷云，是一顆明珠者，未名而道得也，有認之名來，一顆明珠者，直須萬年也，亘古未

此見非三界競起文，如自觀掌中阿摩勒乎，論如四河入海失其本名，支幹形色，齊歸起時，忽忘其姓。



過去二字通本無之

●古佛言，忽然火起，此起非相待，道取火起也。妙經營論品文，破句讀引證如是，非三界競起，宗旨，非相待故。一時佛住，歛然三昧，前後際斷。

●古佛言，起滅不停時如何，然起滅，不停我起我滅也。是問風雷，瑞巖古佛，起滅我我，人法二空，海印三昧，急水上打毬子，念念不停流也。

●此，不停道取應，一任渠辨肯，渠者，起也滅也全機乎，更進步盈溢全機。

●此，起滅不停時，佛祖命脈斷續，怎麼怎麼，不怎麼不怎麼，豈非不停時起滅乎，不停全機，是佛法，宗源無的故，佛祖命脈，斷續也，斷續猶無所住而生心而已。

●起滅不停時，是誰起滅也，是誰起滅，巖頭霹靂，謂之不答話，海印三昧矣。

●是誰起滅，應以此身得度者也，即現此身也，而為說法也，過去心不可得也，汝得吾髓也，汝得吾骨也，是誰起滅故，即現此身也，諸本共有，而恐剩語乎，應以已下，帝網無形，用辨非聲色而已，應以即現，若至者法，若至那法也，不可得是無其形也，汝得吾爾，不屈師資，定分，於是結是誰起滅故，此箇一段，信吾人命脈。

●此法滅時，不言我滅，正不言我滅時，是此法滅時也。正不等下，實是正法眼藏，生滅滅已，寂滅為樂明矣。

●滅法滅也，雖滅應法，法故非客塵，非客塵故不染汚也。不言我滅，於茲道得，客塵，附會底餘物也，今無餘物，交會故純一無雜，諸法實相也。

●祇此不染汚，即諸佛諸祖也，汝亦如是，誰非汝，前念後念，應皆汝，吾亦如是。

誰非吾，前念後念，皆吾故。行佛威儀卷，玄提斯語，文而今白白，宗旨固玄玄也。

●此滅莊嚴多船手眼，謂無上大涅槃也，謂謂之死也，謂執為斷也，謂為無作也，謂如是許多手眼，併滅功德也，併滅等者，不言我滅，宗，忽爾柳枝誘引風耳，六祖壇經卷下，示智常偈言，無上大涅槃，圓明常寂照，凡愚謂之死，外道執為斷，諸求一乘人，目以為無作，盡屬情所計，六十二見本，云云廣說，一二十字，真是圓寂，次二十字，齊情所計，而今云併滅功德也者，與聖寶林之所廢廢也，猥代大匠，斷者，好肉剝斑，恐懼恐懼。

●滅我時節不言，起我時節不言，則有不言同生，而應非同死，不言我滅，滅時不言我起，起時不言我，則有不言我同姓，而應非同名，不言我，謂宗趣者，設使參起滅我，而非有一箇常住主宰底也。

●既前法滅也，後法滅也，法前念也，法後念也，為法前後法也，為法前後念也，不相待為法也，不相對法為也，不相對，不相待，則八九成道得也，此是五十四言，奈何交錯，而無它難為，但結有不言同生，而非同死，不言消息者也，八九成者，不能嬰兒逢著婆和嬰兒而已，既於大修行卷，作車運載參畢矣，未參觀音手眼，八九成，而宗徹底。

●滅之手眼四大五蘊，有粘有收，滅之行程四大五蘊，有進步有相見，有粘，粘，或師作放若改正者，收改放乎，字形幾也，雖然勿強穿穴焉，文底理於八九成道得。



斯無罣礙參究者而已。

●是時通身是手眼，還是不足也，偏身是手眼，還是不足也。八九成友，明覺顯言，遍身是，通身是，拈來猶較十萬里。展翅騰騰六合雲，搏風鼓動四溟水，是何埃壘兮忽生，那箇毫釐兮未止。君不見，網珠垂範，影重重，棒頭手眼從何起，此也。始終還是不足，大慧灰燼後，終不見碧巖，全面孔峨峨然，予己丑，黑漆桶亦有漏耳。

●大凡滅者，佛祖功德也。是即結成無上大涅槃，圓明常寂照，可知。

●干今有道取不相對，有道取不相待，則須知，起初中後起也。官不容針，私通車馬也。非相待滅初中後，非相對，從來滅處忽然起法，而非滅起法起也。法起故，不對待相也。一本作不相對待，官不容針，不受一塵也。私通車馬，不由它行也。從來已下，前後際斷，現成公案也。不對待相，之謂實相，不相對待，恰如雙遮，故今不從，雖然，勿以情謂參取。

●又非滅滅相待，非相對也。通本待對易位，而今文意，開示海印三昧，不二不犯，滅初中後滅也。相逢不拈出，舉意便知有也。非相對起初中後，非相待，從來起處忽然滅，而非起滅法滅也。法滅故不相對待也。應永寫本，知有也下，脫漏非相對起初中後非相待十言，今從通本，相逢不拈出，破鏡不重照也。舉意便知有，開口便見膽也。從來已下，觸處生涯隨分足，未嫌伎倆不如人也。此是三味海印炳然矣。

相得相對通本  
員下處共作  
相對相待列

●縱滅是即今，縱起是即今，但以海印三昧，名為兼法也。佛言等文，無始無終，於是明矣，慎勿異求。

●是即修證不無，只此不染污，名為海印三昧也。三昧現成也，道得也。背手摸枕子，夜間也。現成無為作也，道得無舌人公案也。夜間則背手摸枕子，正當渾淪轉耳，無有它消息，而佛果圓悟大師為摸索枕子義，宗祖亦從之，如觀音卷，至彼參取，光也邪解，摸枕子者，顏回曲肱為枕，衲僧中夜，背手摸枕子，獅臥渾然豈有餘相餘念乎，海印三昧，夜間已。

●夜間如是背手摸枕子，摸枕子非億億萬劫，我於海中，唯常宣說妙法華經也。我於已下，提婆品文，夜間不屬明暗，假使五百萬億那由佗阿僧祇等佛國，復倍東方佛國塵點，不會比及故，且舉我於海等，斯暗昏昏，喚稱夜間，何有差相乎，祇此不染汚海印三昧耳，唯常宣說，其海枯不見底也，又徹底枯故，無有邊際涯岸也。

●不言我起故，我於海中，前面一波纔動萬波隨，唯常宣說也。後面萬波纔動一波，隨妙法華經也。唯然與聖，唯然觀音，一波萬波，前面後面，我於唯常也。萬波一波，纔動隨順，海印宣說也。須知萬法非我，只是海印三昧妙法蓮華經也。

●雖使卷舒千尺萬尺絲綸，而恨是直下垂，卷舒絲綸，只此一波萬波搖動隨也。垂下卷舒，而有遺恨，謂前面一波萬波，後面纔動纔隨，無餘長絲綸。

●謂前面後面，我於海面也，猶言前頭後頭，前頭後頭者，頭上安頭也。無餘物，交肩，謂頭上安頭，前波後波，波波絕待，須知。



●海中非有人、我於海非世人住處、非聖人愛處、我於唯在海中、是唯常宣說也、海中非有人者、其唯海中也、故云我於唯在海中、於海中我、我直是海、海外無物焉、有凡聖面、故云非住處愛處者乎、海枯不見底三昧、只在這裡、

●此海中不屬中間、不屬內外、鎮常在說法華經也、不屬無它、鎮常在耳、今其吾之與海、前波後波徹底、

●雖不居東西南北、滿船空載月明歸也、此實歸者、便歸來也、誰謂之滯水、行履也、唯現成佛道劑限也、也太奇也太奇、不居消息滿船歸、海枯堂上休糧去、佛道無邊三昧時、因、藏六穀中久、始名禪海龜、

●是為印水、印、更道取印空、印也、更道取印泥、印也、印水、印不必印海、印、向上應更印海、印、是謂海印、謂水、印、謂泥、印、謂心、印也、單傳心、印、而印水、印、印空也、印、無舌人解、無舌語、却、知不必骨頭無、印、心空、關鳥飛去、印、海水清行此魚、誰、魚、鳥、少、林、深、雪、賊、心、虛、

●曹山元證大師、因、僧問、承教有言、大海不宿死屍、如何是海、師云、包含萬有、僧曰、為什麼不宿死屍、師云、絕氣者不著、僧曰、既是包含萬有、為什麼絕氣者不著、師云、萬有非其功、絕氣者不著、三百則中、亦復如是、而檢傳燈錄第十七、曹山章及師本錄、一併作萬有非其功、絕氣有其德、而今闕有其德三字、是蓋諸誌所致、爾提唱宗無訛、

●此曹山者、雲居兄弟也、洞山、宗、旨、正、的、斯、處、也、今、承、教、有、言、者、佛、祖、正、教、也、

非凡聖教、非附佛法、小教、非凡聖教、非凡聖教、非斥正傳外、此是參究、莫謗佛教好也、附佛法小教、二十部中、偏見者多、不切正教、則貶稱附名、然勿未參究、狠吐大口、囑々、

●大海不宿死屍、謂大海、應非內海、外海、等、非八海、等、是等、非學人所疑、內海、在七金山、內、外、海、可知、八海、內、海、七、外、海、一、合、成、八、海、也、

●非非海、認海、海之認海也、今謂、如何是海、大海、觸目、大海、然則、似非海、認海、而參究、海之認海也、然則、可知、海無焉、可知、非海、無焉、如是、會取、不會取、知取、不知取、則大海矣、

●設使強為海、而不可謂大海也、大海、非必八功德水、重淵、大海、非必鹹水、等、九淵、衆法、應合成、大海、必深水、而已哉、內海、八功德水、乎、外海、五苦鹹水、乎、重淵、九淵、異名、同體、誌、全波、全水、參、八功、五苦、誌、在附錄、衆法、以下、海口、自、怒、號、也、

●是故、問著、如何海、則大海、未知、人天、故道、著、大海、也、問著、之人、動著、海、執、也、是故、已下、一齊、明白、也、問處、道得、非適、今也、動著、海、執、者、非非海、認海、至、深水、而已哉、文、吟、之、再、三、則、應、黑、山、混、出、月、團、團、也、問、而、開、示、

●不宿死屍者、不宿、應、明、頭、來、明、頭、打、暗、頭、來、暗、頭、打、也、死、屍、灰、灰、也、幾、度、逢、春、不、變、心、也、死、屍、者、都、人、人、未、見、者、也、所、以、不、識、也、不、宿、刀、不、自、斫、刀、指、不、自、指、指、以此、參、取、明、頭、等、則、自、明、了、也、死、灰、通、本、作、死、屍、蓋、鳥、焉、馬、寫、誤、死、灰、不、搖、動、也、不、宿、當、體、可、知、故、有、幾、度、已、下、放、眉、間、白、毫、光、也、不、變、心、者、與、時、相、應、也、幾、度、逢、時、不、變、心、也、於、一、切、法、終、不、動、轉、然、則、測、知、逢、海、亦、復、爾、豈、其、不、爾、乎、豈、其、不、爾、



乎、其不染汚、不假它言、洞然明白、此上西天、乃至汝吾亦復如是、都人人下、似即心是佛、卷文、而其意味、天淵也、彼云長劫修行作佛、則非即心是佛者、即心是佛、未見也、未知也、未學也、不見開演、即心是佛、正師也、語來勢如是、與今懸隔、都人人未見者也者、言死屍自終不見自死屍也、所以不識也、光老漢自拍胸間云、還、識也不、答云、不知。

●師云、包含萬有、道著海也、宗旨道得處、不道阿誰一物之包含萬有、包含萬有也、諸本阿誰作阿難、傳寫誤謬可知、向後道包含萬有、包含于包含萬有也、豈不爾乎、道著海明矣、此是道著、也只大海、自道取聞取也、須怎麼。

●非道大海包含萬有、道著包含萬有、則大海而已矣、從來謂曹山道著、而今聞未曾聞、是時也、大海時三摩地耳、大海無其形而形。

●非識什麼物、而且萬有也、佛面祖面相見、且錯認萬有也、無量生死中、識坐白毫宮、謂聞如斯語、日時坐少嵩、謂錯認萬有稱佛祖面、錯認猶何必不必、可知、非謂熱認、將錯就錯。

●包含時、雖山而非高高峯頂立、雖水而非滾滾海底行、收應如是、放應如是、收應已下、例包含時、是即舉一例諸、故道、一座纒舉盡地全收、正當收時、雖松而非無古今色、唯是收攝、放全機現、雖竹而非有上下節、一是放舍、可知放收盈溢全機焉、包含論空手還鄉也、豈不是腔調哉、如莖草味如金剛杵關。

●謂佛性海、謂毘盧藏海、只是萬有也、海面不見、而真疑著于游泳、行履、海面不見、則全海枯、故云、只是萬有也、喫茶便利及經行、海上游泳斯現成、千古遲疑今道著、萬緣無底本乾城、莫差過。

●論道取多福一叢竹、一莖兩莖曲、三莖四莖斜、錯失萬有行履、而為什麼未道千曲萬曲、為什麼未道千叢萬叢、一叢竹如是道理應不忘、曹山包含萬有道著、即是萬有也、一本即是中間有猶字、甚大非也、又一老宿、論道至不忘一併刪削、是開文面、況於義乎、嗚呼冤枉哉、須知論下六十七言、以例包含萬有、故道曹山包含等、為什麼未道等者、應知多福語裡、未顯著作未道未道、鈞鑠以為相見多福及曹山宗面者也、自有千曲萬曲千叢萬叢、包含明矣。

●僧曰、為什麼絕氣者不著、雖錯疑著面目、而應是什麼心行、從來疑著這漢時、相見從來疑著這漢而已、問處霹靂、千古如是、今是什麼心行、猶言不可思議、謂無固必心行是也、從來疑著這漢者、帝網映去都無影、萬象森羅藏箇中、汝自得吾吾印、汝、正偏回互色元空、色空自在作家客、五百生前尾巴風、一片赤心山河關、是何物、倒起腔調、阿呵呵。

●什麼所在、為什麼絕氣者不著也、為什麼不宿死屍也、什麼所在、非疑著道、宛轉偏圓也、所以道、為什麼不著不宿也、此不著不宿、即是什麼所在也、須知從來疑著這漢、正相見從來疑著這漢也。

●這頭即既是包含萬有、為什麼絕氣者不著也、以僧問處、為三昧海、這頭即向什麼處在是也、方位界畔、總無有窮極焉。



●須知包含非著、包含不宿也。包含非著是難兄、包含不宿是難弟、包含有恁麼、聲色、何處惹染汚。

●萬有設使死屍而應不宿、直須萬年、應不著、這老僧一著子。老僧一著直須萬年、包含在此不宿遍天、鳥飛萬有、死屍魚行、這那、叢竹、圓相現成。

●曹山道萬有非其功絕氣、謂萬有縱絕氣、縱不絕氣、而應不著。既是包含萬有、爲什麼絕氣不著答話故、恁麼、玄提突出難辨、今云、應不著、包含全面是也、向道須知包含非著包含不宿也、以此、獨露真常也、春花秋月、夏扇冬雪、端的、響。

●死屍雖死屍而若有同參萬有行履、則應包含焉、應包含也。前包含它、後自包含、夫萬有無論死活、故同參萬有死屍恁麼、斯玄提即三味海印。

●萬有前程後程有其功、非是絕氣、謂一盲引衆盲也、一盲引衆盲道理、要一盲引一盲也、衆盲引衆盲也、衆盲引衆時、包含萬有包含于包含萬有也、要幾大道非萬有、未其功夫現成、海印三昧也。有其功前程後程、實非絕氣其宗旨者、謂一以下、一齊獨露也、其包含萬有、其功具足、盲引盲也、故名稱參號、網珠無影、包含萬有包含于包含萬有者、鎮州、出大蘿蔔頭也、庭前柏樹子也、不斷風回巖下松、那竿得恁麼長短也、這竿得恁麼短長也、包含龍絕氣、龍海印炳然萬有、無功、絕氣海波寂、不著、風吹不宿空、可惜乎、恃氣者困窮、向萬有縱、及死屍縱、共是非其功有其德也、不宿包含、無拘死活而已。

●正法眼藏海印三昧 仁治三年壬寅孟夏二十日記于觀音導利興聖寶林寺文

明和七年庚寅仲夏在東羽秋田仙北郡板見內邑釋堂山靈仙禪寺網珠無景參了四日十報答、土地龍天善神護法厚恩云 本光時聯書

海印三昧參註附錄

薦福雲語云、波波絕待 錯認萬有一切、諸法未免、此是前波後波、雖有前後却是絕待也、所以者何、同一海印故爾、其重淵游泳得三昧、這頭無有人、只是重困游泳耳之謂三昧、龜印印破徹底清、俗解可知、宗旨、匡知謂涅槃海中七種、衆分其中、第七即是摩訶也、佛世尊、言佛陀龜者於海內外得大自在、是由海印三昧之所致也、豈非印破徹底清乎 萬波湛潮、沒增減、海有潮沙而沒增減、而有無迷悟公案現成也 前波未到後波盟 謂沒增減、謂無始終、盟約有信而非固必。

不宿死屍 華嚴十地卷三十九、七開示十德、又海八德、經云、涅槃經第三十五卷、一海有八奇特、其六、海不受死屍、設有死屍、風飄出、置岸上、四分律、目連我法海、中亦有八奇特、不受死屍、所謂死屍、非沙門非梵行等云云

五苦海 瑜伽論

八功德水 淨穢二品、謂穢土水有漏、非常無勝、善根華嚴經探玄記云、八定、水盈滿也、又稱淨土、經曰、何等名爲八功德水、一者澄淨、二者清冷、三者甘美、四者輕軟、五者潤澤、六者安和、七者除三肌渴、等、無量、過患、八者飲已、定能增長諸根、四大增益、種種殊勝、善根多福、衆生常樂受用、疏家一五色入、攝二、四、觸攝三、味入、攝六、等、法入、攝總、是不臭、香入、攝活、水聲入、攝云、穢土、八水、謂一、甘、二、冷、三、臭、四、輕、五、清淨、六、不臭、七、飲時、不損喉、八、飲已、不傷、腹、已上、俱舍世間品第三之四、論本第十一內海、本如是



涉典錄

第十三海印三昧卷 ▲海印三昧 大寶積經二十五 被甲莊嚴會云 佛言無邊慧譬  
如大海水 乃無量而無有能測其量者 一切諸法亦復如是 終無有能測其量者 又  
如大海 一切衆流悉入其中 一切諸法入法印中 亦復如是 故名海印 印一切法  
印 又如大龍及諸龍衆 諸大身衆能入大海 於彼大海以為住處 諸菩薩  
摩訶薩 亦復如是 而於無量百千劫中 善修諸業 乃能入此三昧印門 於彼印門以  
為住處 但以此法 馬祖語錄卷一云 一念妄心即是三界生死根本 但無一念即  
除生死根本 即得法王無上珍寶 無量劫來凡夫妄想 詭曲邪偽我慢貢高 合為一  
體 故經云 但以衆法合成此身 起時唯法起 滅時唯法滅 此法起時不言我起  
滅時不言我滅 前念後念中念 念念不相待 念念寂滅 唯法起時不言我起 唯法起  
百千異流 同歸大海 都名海水 住於一味 即攝衆味 住於大海 即混諸流 如人在大  
海中浴 即用一切水上 維摩經第五文殊師利問疾品云 維摩詰言 有疾菩薩應作  
是念 今我此病皆從前世妄想顛倒諸煩惱生 無有實法 誰受病者 所以者何 四  
大合故假名為身 四大無主 身亦無我 又此病起皆由著我 是故於我不應生著  
既知病本 即除我想及衆生想 當起法想 應作是念 但以衆法合成此身 起唯法起  
滅唯法滅 又此法者各不相知 起時不言我起 滅時不言我滅 多聞廣學恒沙遍

學 大論卷十一云 如佛偈說 一切衆生智 唯除佛世尊 欲比舍利弗智慧及多聞 於  
十六分中 猶尚不及一 復次舍利弗智慧多聞有大功德 年始八歲 誦十八部經 通  
解一切經書義理 文云 大目犍連舍利弗友而親之 舍利弗才明見貴 目犍連豪爽最  
重 此二人者才智相比 德行互同 行則俱遊 住則同止 佛度迦葉兄弟千人  
以遊諸國 到王舍城 頓止竹園 二梵志師聞佛出世 俱入王舍城 欲知消息 爾時  
有一比丘名阿說示 著衣持鉢 入城乞食 舍利弗見其儀服異容 諸根靜默 就  
而問言 汝誰弟子 師是何人 答言 釋種太子厭老病死苦 出家學道 得阿耨多羅  
三藐三菩提 是我師也 舍利弗言 汝師教授為我說之 即答偈曰 我年既幼稚 受戒  
日初淺 豈能演至真 廣說如來義 舍利弗言 略說其要 爾時阿說示比丘說此偈言  
諸法因緣生 是法說因緣 是法因緣盡 大師如是言 舍利弗聞此偈已 即得初道  
還報目連 目連見其顏色和悅 迎謂之言 汝得甘露味耶 為我說之 舍利弗即為  
其說 向所問偈 目連言 更為重說 即復為說 亦得初道 二師與二百五十弟子俱  
到佛所 佛遙見二人與弟子俱來 告諸比丘 汝等見此二人在諸梵志前者不 諸比  
丘言 已見 佛言 二人者是我弟子 中智慧第一 神足第一 弟子 大眾俱來 以漸  
近佛 既到稽首 在一面立 俱白佛言 世尊我等於佛法中 欲出家受戒 佛言 善來  
比丘 即時鬚髮自落 法服著身 衣鉢具足 受成就戒 古佛道起 滅不停 宏智頌古  
第四十三則出 應以此身得度 普門品大意 我於海中 提婆品大意 曹山大海死  
屍 傳燈卷十七曹山章出



涉典續紹

正法眼藏涉典續紹情卷第十 遠孫張州沙門黃泉無著輯次

○海印三昧 大寶積經二十五、被甲莊嚴會云、佛言、無邊慧譬如大海水乃無量、而無有能測其量者、一切諸法、亦復如是、終無有能測其量者、又如大海一切衆流、悉入其中、一切諸法、入法印中、亦復如是、故名海印印一切法印、又如大龍及諸衆、諸大身衆生、能入大海、能入大海、於彼大海、以爲住處、諸菩薩摩訶薩、亦復如是、而於無量百千劫中、善修諸業、乃能入此三昧印門、於彼印門、以爲住處、又大集十三云、喻如一切衆生、身及外色、如是等色、海中皆有印像、又華嚴出現品云、如海印現衆生身、以此說名爲大海菩提普印諸心行、是故說名成正覺

○游泳詩 邱風云、泳之游之、箋云、水中潛行也、深々海底△傳燈二十八、藥山法語云、直須高々峯頂立、深二海底行○心行△維摩佛國品云、心行平等如虛空、執閉入寶不敬承、華嚴出現品云、菩提普印諸心行故、道生曰、心所行之行也○佛言但以△維摩經、問疾品云、復此病起、皆由著我、是故於我不應生著、既知病本、即除我想、及衆生想、當起法想、應作是念但以衆法、合成此身、起唯法起、滅唯法滅、又此法者、各不相識、起時不言我起、滅時不言我滅、法鼓經云、如佛元起、難可得知、衆生元起、亦復如是○多聞△學記品云、阿難常樂多聞、我常勤精進、爲政云、多聞、闕疑慎言其餘、則寡尤○多語△酉陽雜俎云、多聞多語、得道施道多語多言、損身

惹禍、異聞錄云、白龜年、于嵩山東岩下遇白、授一軸素書曰、讀是可下食語默語、龜年過潞州、自曰我能解多般語、一日太守庭、二雀啾唧、太守曰、彼何言、龜年曰、城西某家有果、可共食、驗之果然○多聞廣學△卷十一云、一切衆生皆唯除佛世尊、欲比舍利弗、智慧、及多聞於十六分中、猶尚不及一、復次舍利弗、多聞智慧、有大功德、年始八歲誦十八部大經、通解一切經書義理○一合相△合相經云、若世界實有者、則是一合相、論云、若世界實有、則冥然是一合相○忽然火起△譬喻品文○非相對火起△涅槃經云、譬如因燧因鑽因手因艾而得火、疏云、燧無自性、亦無火性○起滅不停△維摩經問疾品云、起唯法起、滅唯法滅、會元羅山章云、師問巖頭、起滅不停時如何、頭咄曰、是誰起滅○客塵△首楞嚴一云、憍陳如起立白佛、我今長老於大衆中、獨得解名、因悟客塵二字成果、乃住名主人、以不住者爲客、又以澄寂名空動搖名塵○多般手眼△字出于觀音篇中、六祖壇經、志道章云、無上大涅槃、圓明常寂照、凡夫謂之死、外道執爲斷、諸求二乘人、目以爲無作、今曰、兼手眼、以說多般涅槃、故引此語也○無上大涅槃△乃壇經前條文○謂死爲斷

△又前條之文○官針私車△傳燈十七、曹山答鏡清之語、又出曹山錄○相逢不拈出

△丹霞天然語、出傳燈長慶章中○背手摸枕△出于觀音篇中○億々萬劫△常不輕菩薩品文○我於海中△提婆品文字○一波纔動△傳燈船子章云、千尺絲綸直下垂、一波纔動萬波隨、夜靜水寒魚不食、滿船空載月明歸○滿船空載△乃、上船子偈末句○印空印水△智論云、佛法印有三種、一者一切有爲法、念念生滅、皆無常、二者、一



切法皆無我、三者、一切法寂滅涅槃已一名無常印、二名無我印、三名寂滅印、祖英集、有宗門三印云、印泥、印水、印空、各有頌略之○頭上安頭△陸氏怪語云、志之不立、如作戲人、頭上安頭斬頭不死、會元、洛浦章云、這箇若是頭上安頭、若不是斬頭竟活○大海死屍○華嚴十地品、說海十德、海八德經、涅槃經、共云海有八奇特、其六云、不受死屍、設有死屍、風飄出置于岸上、四分云、目連吾法海中、有八奇特、不受死屍、所謂死屍非梵行○萬有△名義集云、如來藏有四義一永絕百非、二包含萬有三無德不備、四無法不現、關伊子五鑑云、人能斂萬有於一息○內海外海△俱舍云、持軸山、小鏡圍山、中間、謂之內海、小鏡圍山、大鏡圍山中間、謂之外海○八海△長阿含云、八海者、第一須彌山、高廣八萬由旬、其繞須彌香水海、橫廣四萬由旬、已下但說海之量也第二持雙山外、香水海、橫廣二萬由旬、第三持軸山外、香水海、一萬由旬、第四糖木山外、香水海、五千由旬、第五善見山外、香水海、二千五百由旬、第六馬耳山外、香水海、一千二百五十由旬、第七障碍山外、香水海、六百廿五由旬、第八持地山外、已下海橫廣三十二萬二千由旬、此中有四大洲、第九小鏡山外、鹽海、次有大鏡圍山○八功德水△華嚴維摩、并云、何名八功德、一澄淨、二清冷、三甘美、四輕軟、五潤澤、六安和、七飢除、八增長諸根、俱舍云、一甘、二冷、三輕、四軟、五清淨、六不臭、七不損喉、八不傷腹○鹹水△香水與鹽海、而乃內海外海也○死灰△前漢韓安國傳云、死灰不復然乎、莊子、齊物論云、心固可如死灰、杜詩云、自古江湖客、冥心若死灰○幾度逢春△大梅偈句、出于行持篇○高

々峯頂△出于此篇首也○毘盧藏海△大乘同性經、又名證契大乘經、下卷說佛十地、第十地、名毘盧藏海地、毘盧已出○多福一叢竹△會元、杭州多福、嗣趙州、因僧問、如何是多福一叢竹、師曰、一莖兩莖斜、三莖四莖曲○孟夏△玉篇云、四時首月、曰孟月、始也○義雲師著語云、波波絕待△又頌云、重淵游泳得三昧、龜印印破徹底清、萬波湛潮沒增減、前波未到後波盟、海印三昧

正法眼藏海印三昧註解畢



昭和十三年二月十二日印刷  
昭和十三年二月十六日發行



【非賣品】

編纂者

佛敎大系完成會

右代表者

佛敎大系完成會

原 子 廣 宣  
東京市板橋區板橋町九丁目二二三一

印發者兼

原 子 廣 輓  
東京市板橋區板橋町九丁目二二三一

印刷所

佛敎大系印刷工場  
東京市豐島區西巢鴨二丁目二七二二

發行所

佛敎大系完成會  
東京市板橋區板橋町九丁目二二三一

振替東京五五三五一番



380  
12  
642



上海圖書館藏  
民國二十三年二月十五日

上海圖書館藏  
民國二十三年二月十五日  
上海圖書館藏  
民國二十三年二月十五日  
上海圖書館藏  
民國二十三年二月十五日  
上海圖書館藏  
民國二十三年二月十五日



終